

国立民族学博物館の収蔵品(31)

「世界の言語」地図

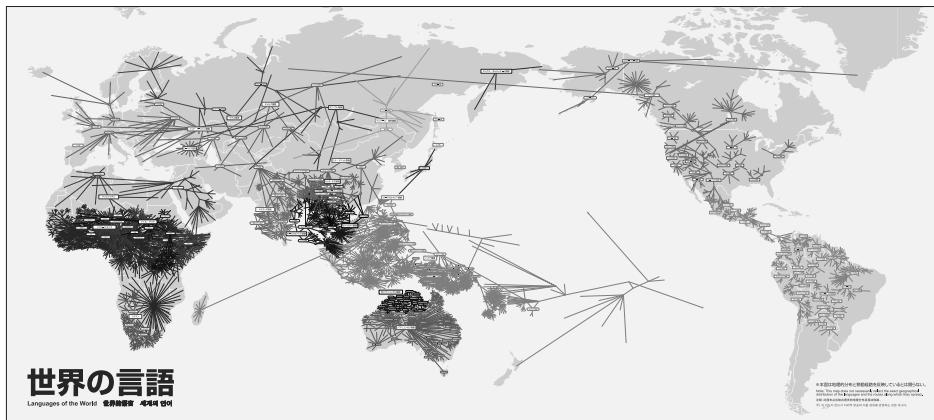


写真1 「世界の言語」パネル（言語展示場）

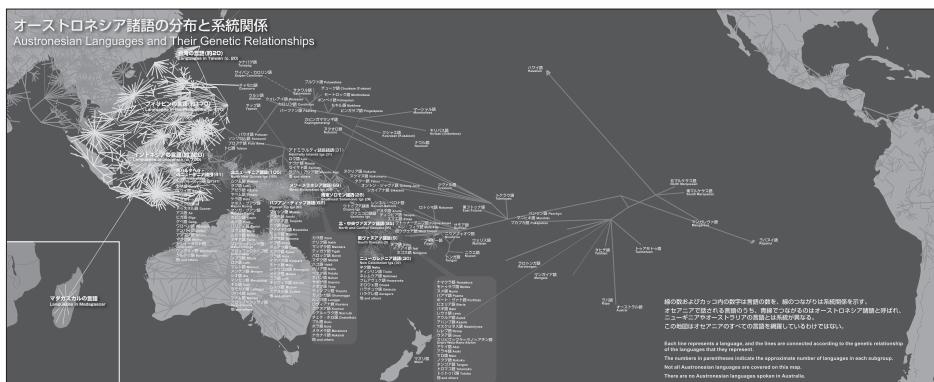


写真2 「オーストロネシア系言語の分布」パネル（オセアニア展示場）

博物館展示や講演会など、一般来館者が対象となる催事で科学者が最も頭を悩ますのは、最新の研究成果を、いかに誤解のないように伝えるか、だと思う。言語展示場にある大型パネル「世界の言語」（写真1）作成も、二〇〇九年改修当時の言語チームの、そんな葛藤から始まった。この展示では、世界で話されている言語を地図の上に点で示し、言語間の系統関係を線で結んで示してある。線は語族ごとに色分けしてあり、ひとめで各語族に属する言語の広がりがわかるようになっている。最初にこのパネルの作成案が出たときには、強く反対するメンバーもいた。そもそも、言語の系統論は研究者間で合意を見て

いない。「そんなものを出したら」とくだんのメンバーは言う。「大変なことになりますよ」。

そうだろうか？ ひとつには、世界の言語すべての系統について、研究者間で最終案がまとまるうことなんて、ありえない。だからその日を待つていたら、永遠に展示はできない。大切なことは、科学は日進月歩、研究の結論は日々変わってゆく、という事実を伝えることではないか。幸いなことに現在では、大型パネルのデザインにもコンピューターを使うのだから、必要に応じて少しずつデータを修正してゆけばよい。……と、いったん合意をみれば、あとはとにかく時間に追われながら一丸となつて作業をすすめ、デザイナーさんからもアイデアをいただきながら、現在のような形にしあがつた。言語チームではこのパネルを、愛情をこめて「花火」と呼んでいる。

二〇一一年に主催した国際歴史言語学会（ICH-L20）では、世界各地から言語の系統に関する専門家が展示場を訪れたが、評価は上々でひとまず胸をなでおろし、以来、専門家にも非専門家にも、たくさんの方に見ていただいた。「世界の言語」は、特に展示を見て考えたいタイプの来館者に人気だ。言語分布の背景に想いを馳せてみたり、「世界の文字」との相関を考えてみたり。出版物やクリアフォルダー作成のために、想定通り、データを修正追加している。データだから、必要な部分だけとりだして、加工することも可能で、実際、二〇一〇年に改修したオセアニア展示には、関連部分をとりだし加工した地図（写真2）が展示されている。

その後、言語チームにも新たなメンバーが加わり、パネルの方も、所属について学説が変わった言語の線を引き直したり、系統的に孤立した言語を取り出して、別の地図を作成したり。また、現在の「花火」は、音声言語のみで手話言語は含まれていない。手話言語には、さまざまな理由で「系統関係」という概念が適用しにくいことがその理由だが、ゆくゆくは、手話言語に関する情報もきちんと展示できるようならなくてはならない。そのためには言語学の進歩も必要。民博のチームの研究推進も必要。

民博での、いや世界の言語研究が進むにつれて、「世界の言語」地図も少しずつ少しずつ、形を変えてゆく。

（菊澤律子）